
第三世界～偽りと虚無と絶望と幸福

ランドパーク西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第三世界（偽りと虚無と絶望と幸福

【Nコード】

N1507H

【作者名】

ランドパーク西

【あらすじ】

夢の中で僕は、「男」に出会った。彼は何者かはわからないが、とても悲しそうに見えた。「男」と僕の対話を中心に少しずつ物語は進んでいく。

ちなみに作者はあまり書き慣れてないので、更新が遅い、文書が短い、とにかく理解が難しい等々ありますが、気長に付き合ってくださいと幸いです。

追伸..もはや短篇集のようなものになってきてしまっています。

第一夜（前書き）

この作品は前作と違い、ファンタジー要素が強くなっています。

基本的な世界観は、これから先に徐々に書くつもりですがカオスで
ある可能性は高いかもしれません。

よって意味のわからないものは嫌いだ、という人は見ないほうがよ
ろしいかと思えます。

第一夜

それは、夢だった。

始まりはいつもあの場所から

永遠に続くと思われた物語

男は言った。「いつか、この世界にもまだ幸福というものがあることを証明したい」と。

僕は言った。「それは永遠に叶うことのない幻想だ」と。

それでも男は続けて言った。「それは、確かに不可能なのかもしれない、でもそれはそれでいいんじゃないのかい？叶わないから願わないというのなら、それは自分で自分の限界をつくっている。それに、願いというのは叶うものじゃない、叶えるものだ」と。

さらに男は言った。「叶えるためには思わないといけない、最初から思うこと自体を否定してしまったら、叶えられる願いも叶わないし、なにより不幸になるのは自分自身だ。つまり叶うか、叶わないか、が大事じゃない、思うか思わないか、が本当に重要なんだ。思った、願った、結果叶わないとしてもそこには必ずそこに到達するまでの物語があり、そこには思い出ができるはずだ。その過程こそが真に必要なことだと私は思う」と。

そして男は満足そうな表情を浮かべた。

月光が僕らを照らし、男の影がふとおぼろげに見えた。

僕には、男がそのまま闇の中に消えていってしまいそうな気がした。

男の顔はもうよく見えないが、確にかすかに笑っているようだった。

それは、自嘲しているようにも思えた。

男はふと空を見上げた。

そして、一つの星を指差し言った。「私はね、あの星を探していたんだ。そしてあの星に行きたいとずっと思っていたんだ」と。

僕には男の言っている意味がよくわからなかった。正直、変な人だとさえ思った。

そしてしばらくして僕は言った。「どうしてあの星を探していたのか？」と。

男は空を見上げたまま言った。「あそこには私の、幸福のカタチがあるかもしれないからさ」と。

僕はますますわけがわからなくなった。僕が頭を抱えていると、男は呟いた。「きっとあるはずなんだ」と。

僕はさらに聞いてみることにした。「じゃあなんであの星に行きたいのか？」と。

男は俯きながら言った。「あそこには約束があるからさ」と。さらに男は微かに呟いた。「ずっとずっと昔の約束が」と。

風が僕たちの間を駆け抜けた。

男は「もう時間だ」と言った。

そして辺りの月明かりが集束をはじめ次の瞬間四方に飛び散った。

風が強く吹き、全身を悪寒が襲った。

膝がガクガクと震え、声は出なかった。

う、とか、ああ、とか、そんな呼吸がやっとできただけで嬉しかった。

頭の中をグルグルと駆けまわる痛み。

ああ、知っている。

僕は、この痛みを。

いつかもこんな鈍い痛みが僕を襲ってきたんだ。
口の中は苦くて、目はまだ眩んでいる。

カチカチと音がして。

僕は意識を失い、目が覚めた。

ノスタルジア

光の色が淡く見えて、僕はまだあの世界にいるのか？と一瞬錯覚した。

が、それもすぐに違うと認識できた。

ピピピピというけたたましい音がしたからだ。

とりあえず僕は、その騒音を止めようと体を起こし軽く伸びをした。

そして、騒音発生装置に華麗にチョップをおみまいしてやった。

音は止まったのだが、残念なことに時間がわからなくなってしまった。

「南無南無」と軽く祈っておいたので万事おっけーだ。

とりあえず、僕は着替えることにした。

着替えるためにクローゼットを開けたらそこには22世紀からきたという青いタヌキ……

がいるはずはなかった。

どうも、変な夢を見てしまったせいで頭がまだ混乱しているらしい。

改めて夢の内容を思い返してみることにした。

確か、クリームシチューを食べながら変な異星人と腕相撲をして素数を数えて……

では、なかった気がする。

しかし、なぜか思いだそうとすると頭が痛み何も思い出せなかった。
ズキズキと痛む頭を抱えて顔を洗いに洗面所にむかった。

ドアを開けてみると、そこは見慣れない草原で、シマウマとかアル
パカとかディプロドクスとかおっさんとかが草をもしゃもしゃと食
べていた。

? 僕は戸惑った。

? ? とても戸惑った。

? ? ? すごくとても戸惑った。

ソウダ、キット、マダ、ユメノナカナンダナ
ボクハキットマダユメノナカデ

目を瞑った。

瞑想した。

黙祷した。

緊張しながらゆっくりと目を開けて見ると、そこにはいつもの日常
的光景。

大理石の廊下、金の装飾を施された壁。
シャンデリアがとても高い場所にある。
窓から見える庭園は・・・

・・・ん？

大理石？

いや、まて金？

シャンデリア？

やっぱり今日の僕は少しおかしいらしい。

きっと全部あの夢のせい、・・・思い出せないけど。

とりあえず最初見た光景よりはだいぶましになったので今日はこれでよしとすることにした。

きつと、なんか今日は日常にはもどれない気がしたから。

こうなったらこの状況を楽しむしかない、と自分を無理やり納得させる。

長い大理石の廊下をひたすら歩く。

ここはどこなのか？僕はどこに向かっているのか？
この屋敷は広すぎる。

洗面所はどこなのか？

いまだにたどり着けない・・・

顔を早く洗いたいのにー！と心の中で叫んでみても状況は何も変わらなかった。

そこで、もう一度目を瞑ってみることにした。

そして、祈りを捧げた。

これで、きっと大丈夫！とガッツポーズをして目を開けると、そこは物置だった。

なんで物置だとわかったのかというと、置いてあるものや建物のつくり、そしてなによりもこの風景は見たことがある。

そう、僕の幼いころに住んでいたあの家の物置だ。

懐かしい。とても懐かしい。

僕はしばらくノスタルジーに浸った。

すぐく心が感傷的になりながらも必死に溢れだす感情を抑えようと胸に手をあててその場に立ちすくんだ。

目から一滴雫がこぼれおちたが僕は泣かなかった。

懐かしいにおいがする。ああ、とても懐かしい。

この家は確かにここに存在している。ああ、何たる奇蹟。ふと周りを見渡すと僕の●●があった。

見た瞬間に強烈な痛みが生じた。ビリビリビリと激しい。

電気ショックを受けたようにとてもダメージを受けた。星の瞬く間に僕は三回転した。

ほとばしる音と音と痛み。

そして紫のなにか。

「3度目はないぞ！」。

男の声がした。

そして、僕はどこかに飛ばされた。

あいだ

こぼこぼこぼこぼこぼこぼこぼこぼこぼ

沈む

沈む

まるで

川に投げられた石のように

まるで

重い

とても

そう、とても

吸い込まれる感覚に

いつしかのみこまれていった

空気があるのかもわからない
ただ

排水される感覚とともに

空気を取り戻した・・・

・・・気がした

「僕はねー。紅茶はあまいミルクティーしか認めてないんだ。」
そんな声が聞こえた。

「あのさ、だから俺はストレートが好きだっていつてるだろ！」
そんな声も聞こえた。

・・・
・・・
・・・

それからしばらくして、声が聞こえなくなり。

隆哉は記憶の底に幻と散った。

その物語はそこで終わり。

そして、その記憶は記録されることなく。

カタチを保たずにその世界を終えた。

山はあった、谷もあった。

これからさきはどんな景色が待ち構えているのだろうか？
やがて音は消え去り、なにもないという映像が頭に垂れ流される。

正直死にたい気分だった。

それでも踏みとどまったのは神のきまぐれかそれとも意外にも強い己の生への欲求か？

沈む感覚の中で僕は祈りをささげた。

**その先を1..00

いつのことか秋の夜長。

荒廃した街に長く響く遠吠え。

腐敗した臭いが辺りに立ち込めて。

滴り落ちる紅い雫が月の光を反射している。

人の群れに集う死霊。

亡霊の夢。

この街にはもう生物はいないらしかった。

音と音の隙間に微かに鳴るネオンの音。

夜は長い。

永遠とも思える時間に支配された街。

闇がある。

光はない。

世界に求めた。

ただ、あることを。

そう、そこにあることを。

それすらも叶わない。

.....

・夢？

それは醒めるのだろうか？

たしかに夢なのか？

いや、現実？

それはわからない。

それがセオリー。

月がある。

空には。

地上には生物ではないナニかが蠢いている。

この世界に人は生まれるのだろうか？

得体のしれないナニかが蠢くこの場所に。
それは罰？

運命？

宿命？

ひどく交錯していて神経が乱れる。

血が脳内を逆流して目に激痛が走る。

どうやらここは、場所^{モクデキ}ではないようだ。

昔、あった約束。

その向こう側。

男が言った言葉。

男が往った場所。

空間が支配する空間。

流れ込む知識、いや映像はひどく残虐で。

どうやら、男の記憶のようだ。

+++++

+*****+

人が倒れている。

紅い水溜りの中に。

人が動いている。

紅い水溜りの中で。

人が唸っている。

紅い水溜りの中で。

人が、人が、人を。

.....
.....
.....

思考停止。

11番目と26番目の再生を停止。

24番から再生開始。

*..;; ++

..; **

++++;;;

+**;; ..++

If the world /
Maybe later, I have to talk ab
out my story.

;;; + ** +.

++++++ ++++++

<

24番は崩壊。25番の再生。

その日はひどく雨が降り。

風が強く私は家に引きこもっていた。

窓から見る景色はとても新鮮で夢と現実の間に湧いた泉のようだった。

窓の外には傘を差して歩く人々が見えた。

談笑しながら歩く人。

もくもくと歩く人。

走る人。

傘を差さずにいる人。

様々な光景が見える。

その一人ひとりに用意された設定。

物語、いやstory。

私はずっと見ていた。

近くにいるのは女の子だろうか？

赤い傘を差している。

風が強く吹いた。

そして記憶は途切れた。

・
・
・

えめん（前書き）

後で直すかもしれません

えめん

おもてのうらはうらのおもて。

「そのものがたりをここでおえるんだよ」

銀色のクレヨンで地図を描いた。

真っ白な壁に大きく。

「後悔はやがて蓄積し苦しめるんだあー」

表にあるフリージアを眺めながら鼻歌を聞いていた。

「今日も暑くなりそうだねー」

「うん、本当にそうね」

200 m先にある赤いポールが霞んで見えるくらい暑い。

「クーラーを強くしていいかな？」

「構わないけど電気をつくってよね」

「ちよっとおー、冗談はやめてよ」

笑いあった。

そういえばご飯をまだ食べていなかった。

冷蔵庫にはジャムとチーズ。

しかたない、パンだね。

「ねえ、ご飯食べる？」

「うん、食べる食べる。ところでなに？」

「・・・パン」

「・・・まあ、いいかな」

「嫌なら食べないでよ」

「いや、なんていうか。嫌ではないんだけど、こう、なんというかその。もっとなにかおかず的なものがほしい気が・・・」

「・・・私も」

「「・・・」」

「やっぱりどこかに食べに行かない？」

「ちょうど私もそう思っていたところよ」

私たちは外にご飯を食べに行くことにした。

城壁のすぐそばに新しいカフェができたのでそこに行くことにした。

「ねえ、どうせだからウォーロックも呼ばない？」

「えー。うーんウォーロックはいいけど呼ぶとアイツも来ちゃうよ？」

「いいじゃないたまには、しかしあなた本当に彼が苦手なのね」

「だって、理想ばかりで何もできない男なんて最低じゃない？」

「まあ、そうかもしれないけど。でも、魔法の腕はすごいわよ」

「んー、そうなんだけどだからこそ嫌だっていうか・・・強いなら戦えばいいのにつて」

「あー。たしかにたしかに。でもまあ今日はいいでしょ？」

「わかったわよー」

メアリーはしぶしぶしたがった。

「それより早くカフェに行こうよ！暑くて暑くて」

「そうね。早く行きましょう」

カフェにつくとモーニングを二人分注文して、ユリアは電話をした。そう、ウォーロックに。

ほどなくして彼らが来た。いや、実際にはウォーロックしか呼んでないのだけれどね。

小声でユリアに話しかけた。

「やっぱり来たじゃない」

「そうね。まさか本当に来るなんてね。あなたに気があるんではなくて？」

「ちょっと！やめてよね気味が悪いわ」
と言ったところで入口から声が聞こえた。

「やあ、今日は暑いね。暇だって言うからザーウィンも連れてきたよ」

「ごきげんようウォーロック。・・・ザーウィン」

「朝からご機嫌斜めだねメアリーは」

「生理か？」

とザーウィン。

本当に無礼なやつ。無視してやるわ。

「ザーウィン。そんなこと言っちゃダメだよ」

「そうですね。言動には気をつけなさいザーウィン」

そうでなくても嫌われてるのですから・・・とユリア。
多分聞こえちゃってるよ？

「二人ともいつまでも立ってないで座りなさいな」

「ああ、そうさせてもらうよ。ユリア、メアリー」

さすがはウォーロックさりげなく私の近くに座った。

そして小声で「ごめんなメアリー。ザーウィンはちょっとデリカシーがなくて」

私も小声で「気にしないでいいよ、あなたのせいじゃないから」
と言った。

「お二人は何を飲んでいますの？」

とユリアは聞いた。

「ここの店は紅茶がおいしいよ」
と私は言った。

「「うーん」」と二人は唸った後。

「じゃあ僕は甘いミルクティーかな。ザーウィンもそれでいい？」

「いや、俺はストレートだな。だいたい甘いミルクティーとか紅茶じゃないだろ」

それから480秒くらい二人は紅茶の話で争っていた。

「まあまあ二人とも、じゃあこうしましょう。メアリーにお二人の飲み物を決めてもらいましょう」
いいわよね？とユリア。

「なんだよそれ、ふざけんな！」

「僕はそれでいいよ。ザーウィンはなんで嫌なの？」
ウォーロックは鋭い眼光でザーウィンを見た。

「・・・わかった。それでいい」
もはやザーウィンは反論する気持ちも起きないようだ。

「それではメアリーお願いね」
まさかここで私に回ってくるとは思わなかった。

「じゃあ、二人の好きなので」

「僕はねー。紅茶はあまいミルクティーしか認めてないんだ。」

「あのさ、だから俺はストレートが好きだっていってるだろう！」
しまった。これでは何の解決にもなってない。

「えっとーお二人さん？いい加減にしてくださいさる？」

と、とても黒いオーラを纏ったユリアが言う。

こ、こわい。

「「はい」」

と素直な二人。

結局ストレートティーとミルクティーに落ち着いたのだ。

とても長くて遠い日々。

Time logic ***1

サン・ペルムから歩いて15分のマーガルス広場に位置した家。それが私の家。3階建てでレンガ造りで大きな窓が特徴のおしゃれな家。

私はとても気に入っている。

窓からは広場が見えて、広場の中心には噴水があって子どもたちがはしゃいでいる。

こんなに暑い日は私も水場で遊びたいと思ってしまう。
エンテンペオからもう2年も過ぎた。

と、嫌なことを思い出してしまった。

私は気を紛らわすために外に出て、噴水の近くのベンチに腰を下ろすことにした。

強い日差しが容赦なく照りつける昼下がり。

子どもたちのはしゃぐ声を聞きながら一人ぼーとしているのだった。

ここは幸い木陰になっていて、風が吹くととても心地がよい。
そうしているうちに私はいつしか寝てしまっていたのだった。

目を覚ますと、そこは荒涼なる大地にある月の見える丘の上。

・・・月が・・・近い。

私は理解できないことを生じた。

ここはどこだろうか？見たことがない風景だ。

もし、ここが異世界であるのならここはあまりにも私の世界と違う。それは、なぜかという生物の気配がしないのだ。空気も凍りついている。まるで私がこの世界でただ一人の生物のようだ。もし、それが本当だとしたら私には何もない。私は焦った。ここはどこでなのか？そしてなぜ生物の気配がしないのか？

でも、私はいる。

それは矛盾？

それは道化？

それは惨め？

私はこの世界にいる。

でも私は誰で何をしたいの？

あの噴水はどこにあるの？

子どもはどこにいるの？

ねえ、教えてよ。

・・・だれか・・・

私の・・・私の家はどこ？

ふと、空を見上げた。

テキーラを持った月が嗤いながらこちらを見ている。

「やあ君は新しいね。そしてとても古い。それがまた素晴らしい」

「・・・あなたはなに？月？月がなぜ話すの？」

「月が話しちゃいけないなんてルールはないだろう？」

「それは・・・そうだけれど・・・」

私はおかしくなってしまったのか？月と会話しているなんて。

でも話せるのならここはその異常は見逃してもっと大きな異常の手掛かりを知るのが先決だ。

「ねえ、教えてよ。ここはどこなの？」

月はグラスを傾けながら「それは君が知っている」と言った。

構わず私は質問を続けた。

「ねえ、教えてよ。あなたは誰？」

「月」

「ねえ、教えてよ。私の家はどこ？」

「君がいる。そして生きている。それが答え。君の家はここにあるかもしれないし、ないかもしれない」

「ねえ、私はいったいどうしたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それは今から君が確かめるべきこと」

と言って月はテキーラを口に含んで一気に飲み干した。

「ほら、見て御覧。あれが、永遠の約束。叶わない夢。儚い願望。届かない場所」

月は酒に酔ったのか突然意味のわからないことを言い始めた。

「そして、このものがたりはここで終わるべきなんだ」
突然男の声が聞こえた。

「やあ、青年。また会ったね。今日は月がきれいだよ」
くっくくくと嗤いながら月が話す。まったく月が月がきれいななんていうなんてどういうことなの？

「やあ、月。また会ったね。今日はお客さんがいるようだね」
くっくくくと笑いながら男の声が話す。いったい誰なのだろうか？

「ちょっと、あなた姿を見せないさいよ。レディーの前に姿を現さないで話をするってどこの常識しらずなの？」

「ははは、すまない。つい、癖と言うべきかな？ 私はそんなつもりはなかったんだが・・・」

おっと、すまない。時間だ。では私はこれでお嬢さん」といって男の声が遠ざかっていく気がした。

「ちょ！待ってよ。あなた、聞きたいことがこっちは山ほどあるのよ！！！」

という私の声は空しく空に響いた。

「はっはっはー相変わらずなやつだな。お嬢さん、あいつのかわりにこの月が、あなたの質問にこたえましょう」

と、テキーラのグラスを傾けながら言われてもなんとも言えない気分だ。

でも、まあ状況を確認する必要があるし、それでは聞いてみようかしら。

「ねえ、さっきの男は誰なの？」

さっそく気になったことを聞いてみた。もうこうなったら私の世界のことなど考えていてもしかたがないと思ったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

月は何も答えない。

「ちょっと、あの男のかわりに質問に答えてくれるんじゃないの？」

「・・・ああ、そうだね。少しびっくりしてしまっさ。てつきりこの世界はどこ？とか聞くと聞いたから。」

「・・・たしかにそのことも気になるのだけれどなぜかさっきの人が気になるのよね、なんていうかなつかしい？というか」

「できればその質問以外にしてくれるかな？こちらにも回答があるものとなんがあるんだ」

「親しそうに話してたくせに回答がないってどういうことよ？と思いがながらも従うことにした。」

「じゃあ・・・さ。もう一度聞くんだけれど、ココはどこ？」

「そうだね。君は世界は一つだと思いかい？」

「なにを唐突に？世界は世界でひとつでしょ？」

「では、もしそれが違う、と言ったら君は信じる？」

「え？どういうこと？世界は一つではないってこと？でも、それはいったいどういうこと？」

「世界って世界の世界だよな？」

「そう、世界は世界。たぶん君の想像するものと違うものだと思うが紛れもなく世界は世界だ」

「私が考えているのと違うの？それはどういうこと？」

「世界。君はきつと地図を思い浮かべてだろう。そして、地球を思い浮かべただろう？」

「ええ、そうよ。それが世界でしょ？」

「たしかにそれは世界だ。でも、それはあくまで外部状況の世界だ。世界はそれだけではない。内側にもあるんだ。そして君が今いるのがまさしくその内側ってことさ」

「・・・・・・・・・・・・？？？？？」

まったく私にはわけがわからなかった。月はなにを言っているのか？世界は外部の状況で世界はほかに内側にもある？ってどういうこと？

「じっくり考えるといい。時間はたっぷりある」
そして月は嗤った。

二転三極 0001

対極に位置したもの。

それは語らない。

スポンジを押した。へこんだ。

さらに押し込んだ。へこんだ。

さらに押し込んだ。穴が開いた。

むこうがわが見える。

むこうがわ。そう、語られないむこうがわ。

「やあ、こんにちは今日も会ったね」

「やあ、こんにちは奇遇だね」

「それで今日はどんな悩みを？」

「さあ、自分でもわからないから」

「教えてごらん、きっと導けるから」

叫んでも、誰も助けてはくれなかった。

少年は心に深い傷を負った・・・のだと思う。

でも、少年は救いを求めた。

だから、少年はもう壊れかけていた。

確かに、彼は見た目には何も問題はなかった。

礼儀正しく、謙虚で誠実だった。

友達も・・・いたはずだ。

でも・・・それは過去の話。

今は、今の話。

今は、少年に何も希望はなかった。

だって、何を信じればいい？

何を頼ればいい？

何を求めればいい？

何を？ いったい何を？

そして、少年が本当に不幸だったことは。

それすらも、教えてくれる人がいなかったことだ。

語られないことは語られないままでもいいのか？

人は人であるなら、人でない人はいないはずだ。

孤独の中での少年はいつも虚ろで、空ばかり眺めていた。

いつか・・・いつか・・・

少年の目に映るのは、空の色と雲。

雲のカタチは絶えず変化するのに空というキャンパスはなぜ変化しないのか？

それが専らの彼の悩みだった。

もう、幸福はわからない。

もう、感情もわからない。

世界はひどくどんよりとしていて、鉛色の塊が蠢く。

鉛色の塊は僕を見て言う。

「どうしたの？言ってるらん？」

僕はこう答えるんだ。

「僕の幸福はどこ？」

たいていの塊はこれで立ち去る。

例外はあるが。

その例外の話をしよう。

「君の幸福は私が持ってるよ」

そう答えた男がいた。

「え？返してよ！僕の幸福！！！！」

「ちょっとこっちについてきなさい」

男は言っ僕に背を向ける。

僕はもう限界だった。そう、限界だった。

だから。だから。

・・・男は何も言わなくなった。

そう、僕が＊したから。

でもね。

でも、仕方ないんだ。

これはね。だって彼が悪いんだ。

僕の幸福を奪ったから。

そう、彼が悪いんだ。

そう、みんな彼が悪いんだ。

だから、これはきつと正義なんだ。

それはなぜか僕に、おばあさんの手を連想させた。
その葉っぱをくるくると軸を持ってまわしていた。
ところどころ穴があいていて、僕はふとその穴をのぞいてみた。
カメラのファインダーから見る風景のように、葉っぱは僕から真ん中以外の視野を奪った。

かすかにぼやけて見える向こう側に僕は感動した。
なぜか感動したし、涙が出てきた。

公園には誰もいない。

葉っぱの向こう側には人が見える。

それは、幻か？

否。

たしかに存在すると思われる。

自分はそれを他者であるという認識をした。

自分の周りと、自分の世界の感覚の還元を試みた。

色、音、触角、嗅覚、ありとあらゆる感覚というものを僕は捉えなおしてみた。

実在するのは、たしか？だが、映る場合と映らない場合があるのはなぜだろうか？

急に、葉っぱの向こうの影の存在が僕の正義を問う。

「それは、たしかに正義？」

「ああ、たしかに正義だ」

「でも、彼は何もしていない」

「いや、彼は俺の幸福を奪ったんだ！」

「それは本当にそうなのか？」

「も、もちろんだ!! だって、だって彼がそう言ったのだから!!」

「自白は信頼に値するものなのか？」

「・・・」

「科学的な根拠も動機の裏付けも方法の検証もしていないではないか。君はつまるところ彼を＊すことで自分の正当性、自分の存在を、自分の抑えきれない衝動を発散したかっただけではないのか？ 少なくとも客観的にみて異常なのは君のほうだ」

「・・・・・・・・・・」

「そこに、正義の可能性はあるのか？」

「・・・・・・・・」

本当はそんなことわかっている。でも、でもどうしようもなかったんだ。このままでは僕は一生姿の見えぬ亡霊と闘っていかなければならなかったから・・・

僕にはアレが恐くてたまらなかった。

アレはどこにでもあって、アレは実体のない実態だった。

たしかに、僕は逃げたかもしれない。でも、今まで闘ってきたんだ。独りで、そして僕は耐えてきた。

いくら耐えても、いくら時間が経ってもアレはそこにあって、アレは僕に苦痛を与え続けた。

そしてその間、誰も助けてはくれなかった。助けを請わなかったから？

いや、それはない。

なぜなら誰から見ても僕は普通じゃない精神状態だとわかったはずだからだ。

それで、それで僕はもう追い詰められていた。

「し、しかたなかったんだ。ああ、しかたなかったんだとも」

「それが、そんなことが許されるとでも？」

「・・・」

「君は、知っているはず。君のしたことは正義ではなく罪であると」

「・・・そ、そんなことはない・・・はず」

「何人も現実からは逃げられない。現実には逆らえない。君が今すべきことは現実を受け入れ、次の現実を受けいれること」

「・・・受け入れてるよ！そんなの！！！！ぼ、ぼくはこんな理不尽な社会でたった独りだと受け入れてるよ！！！」

「それは幻想だ。君は決して独りではないし、理不尽ではない。そして、だからこそ君は次の現実をうけなければならぬ」

「そ、そんな・・・僕が独りじゃないなんて・・・そんな、じゃあ僕は今までいったい何と闘ってきたんだ？」

「君は、君の幻想と闘ってきたただだよ」

「・・・そんな・・・そっか。あれはすべて幻想、だったのか」

僕にはなぜかそれが真実である気がしていた。

「そう、そして次に進みなさい」

淡々と語る口調に僕は戸惑ったままだった。

「……。次ってなんだい？」

かろうじて聞きたいことを口にした。

「罪のあとには、罰がある」

「……そうか今度は僕がうけるべきなんだね」

「そう、それがひとつの道。道は選択できる。もし、君が違う道を歩きたいなら君はそうすればいい。もし、君が道を迷うなら彷徨えばいい。もし、君がこの現実を破棄したいなら君はここで死ねばいい」

「……そう、か」

「それで、君はどうする？」

「それでも僕は、僕の正義を貫き通すよ！」

もう、僕にはそれしか何もないんだ。だから僕はこのまま逝くしかない。

「……そう、あわれな傀儡。ではその選択をわたしは見届けて。」

そしてわたしはあなたの未来を奪う」

「ああ、ありがとう、できればもっと早くに君に会いたかった」

「・・・そう」

「ありがとう僕の死。ありがとう」

「それではそれでは夢に墜ちなさい」

僕と僕の代理のトマトと（前書き）

どーも作者のランドパーク西です。

誤字脱字等ありましたら遠慮なくつつこんでくださいね。

あと、ここがよくわからないとありましたらそれも。

基本的に作者が暴走してる作品なんで、よろしくお願いします。

僕と僕の代理のトマトと

トマトである。

そう、トマトである。

ああ、実に僕はトマトだ。

僕はトマト。

そう、僕はトマトで僕のトマトは僕とトマトのトマト。

トマトに僕は、トマトは僕に。

それぞれが関係している。

それからトマトはトマトでなくなつて、それでも僕はトマトではなくて。

でも、トマトはトマトであるのもたしかで、僕は僕であるのもたしかではないのかもしれない。

結論から言うと、トマトは僕の代理だ。

だから、あの日トマトは真っ赤に染まった。

そう、トマトの僕は真っ赤に染まったのだ。

どういうことか？

トマトは僕の代理になったのだからトマトの僕は潰れて真っ赤に染まった。

そう、トマトが、僕の代理だから。

それで、トマトは僕になった。

でも、僕はトマトじゃない。

トマトになった僕はトマトじゃないけれど、僕になったトマトは僕だからトマトではない。

トマトはたしかに潰れて、真っ赤に染まった。

僕は、トマトに代理になってもらったので真っ赤に染まってはいない。

それでもトマトは、僕の代理だから少しは僕にも被害があって、僕
の感覚に浮かぶトマトは僕と感覚を共有していた。

結論からすると、痛みはあった。

それこそ、僕の中の傀儡を起こしそうなほどの。

息苦しさはあったのだ。

ただ、辛いとは感じない。

それは、何なのだろうか？

脳内麻薬でも使われたのだろうか？

さて、それは置いておこう。

トマトと僕は次の段階に進む。

原理はこうだ。

僕が1つ、ボードのマスを進むと、あちらのトマトの僕は3つマスを進む。

そういう仕組みだ。

簡単だが、ゆえに難しい部分もある。

止まりたいマスに止まれないことがあるのだ。

それがトマトと僕の隔たりそのものかもしれない。

止まることができないのは非常に大変な制約。

トマトの僕には明日がないかもしれないし、逆に僕には明日がないかもしれない。

これが条件としていかほどにきついのか？

「さて、君にわかるかい？」

「いや、わからないさ。もちろんだろ。だって君は僕じゃなくてト

マトじゃないか!」

「そう、そして君も僕じゃない。君は君ではないのだよ。なぜなら私が先にいく」

「違う!それは違う!いくら先に行こうが僕が僕なんだ!」

「もう、それは過去の出来事さ。君は僕を代理にした時点で失われたんだよ」

「・・・そ、そんな。そんなことない!!だって僕はココにいるじゃないか!!!」

「さて、はて。君は夢に墜ちたのではないのか?」

「どうして代理のくせに、君は僕の邪魔をするんだ!!どうして君は代理のくせに僕を無視するんだ、否定するんだ!!!」

「君はなにもわかってないのだね。それは、僕が君の代理だからさ。君が僕を代理にしたんだ。そう、言うなればすべてはそれが原因。そうだろう?君が僕を欲した。僕はそれに応じた。そして君の唯一の代理人になった。そう、唯一の。わかるか?わからないのか?君はね。もう、僕ではないんだよ。僕が僕なんだ。君はもう誰でもない。なぜなら僕が君で、僕が僕だからだ」

「どーしてだ?どーしてこんなこんなことに・・・」

「君は逃げたのさ。結局のところ。逃げて逃げて逃げて、僕を代理にした。それで君は潰されなかっただろ?」

加速（前書き）

どーも最近がんばってる気がするランドパーク西です。
誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

加速

加速する。ただ加速する。

器には許容することができないほどの加速。

加速する。

風をきる。

全身に感じる。

我、ここにあり。

故に我、ここになし。

ここにあるのが観測された時には我はもうここにはいない。

加速。

とてもない加速。

加速する。

残像の中に人は光をみる。

遠い世界の違う話。

今からそれを始めよう。

[illegible]

「アナスタシア！」

城の中に声が響く。

「おい、アナスタシア一体どうしたというのだ？」

返答がなくても男は続ける。

アナスタシア、と呼ばれた女の子は現在部屋にこもっている。

「……もう！嫌いよ！兄さんなんて！！」

そんな声が部屋の中から聞こえてくる。

「ちよつと、落ち着けてアナスタシア。どうしたのだ？ 話し会え

「わかるはずだ」

「嫌よ！兄さんなんて大っ嫌いよ！！！」

兄さんと呼ばれた青年は困った。

実はこれから彼は、隣のアルカディアで行われる賢人会議に出席しなければならぬのだ。が、そのことを妹のアナスタシアに伝えた途端にこの有り様だ。

「なあ、アナスタシア。もう行かなくてはいけないんだ。頼むから返してくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋の中からは無言がかえってきた。

うーーん。なにかマズイことを言ってしまったのだろうか？

ウォーロックは考える。

そしてひとつの考えにたどり着く。もしかしてアナスタシアも行きたいのか？と。

このままでは埒が明かないので、思いついた先ほどのことを言ってみる。

「・・・・なあ、アナスタシアも一緒に行くかい？」

「え！」

中から声が聞こえた。その声は驚いているようだった。

”一緒に”！？

アナスタシアは考えた。

そしてすぐに。

「し、しかたないですね。に、兄さんがそのようにおっしゃるなら・」

ウォーロックは内心。よかったこれで会議に間に合う、と考えていたが、一方でアナスタシアというと『やっぱり兄さんには私が必要なんだわ』と勝手な解釈をしていた。

そのころアルカディアではちょっとした事件が起きていた。

昨晚に何者かが賢人会所有の会議室もとい、グランコートに忍び込

んだらしいのだ。

らしい、というのは強化の魔法で固定されていた城門の鍵が破壊されていたからわかったのである。

それでも、特に盗まれたものなどなく。さらに城門の鍵以外に破壊された形跡もなかったので今日の会議は予定通りに行われることになった。

「特に盗まれたものもないですし、たぶんイタズラですね。きっと自分の魔法の腕を試したくてやったのでしょう。それで何回もやっているうちに壊れてしまった、と。だから慌てて逃げたのでしょうか？　そうでしょうゼアス高等審議官」

「うむ、たしかにそう考えるのが妥当じゃな」

しかし、心の中で高等審議官のゼアスは疑問に思っていた。

『グランコートに忍びこむとはなかなかの魔法の使い手に違いない。なぜならあの城門の鍵は大魔法使いのウェスレス代行によってつくられたものだ。それになにも盗られていないというのも妙だ。たしかにあそこには特に価値のあるものはないが、大皇帝の憲章がある。それが盗られていないのは妙だ。売れば数億はするはずだ』と。

それから会議に行くための準備（主に衣服や食糧）をして、無事に支度が整ったので出発しようと馬車に乗り込んだ。アナスタシアは、と言うとすでに馬車の中だ。

しかし、そこで「お、お待ちくださいウォーロック様。これをお持ちください」

黒い包みを渡された。

ウォーロックは「これはなんだ？」と問いただしたが、かえってきいた返答は「困った時にきつと力となるでしょう」と言うだけで何も中身については教えてくれなかった。

「そうか、ありがとうルータス。それでは行ってくる」

「はい、どうかお氣をつけて」

とルータスは深くおじぎをして彼らを見送った。

加速―1（前書き）

すみません遅くなりました。そして大幅に削除したため内容が少なくなりました。

意見等ありましたら送ってください。

参考にさせていただきます。

それではめくりめく物語の続きを

加速―1

ルータスに見送られてウォーロックとアナスタシアはアルカディアに向かっている。

アルカディアまではあと半日ほどで着く予定だ。

ちなみに会議自体はあと数時間で始まる。つまりウォーロックは遅刻だ。

これは異常事態だ。

なぜならこのウォーロックという男、非常に実直で時間も正確に守ることで有名であり、まさか遅刻をするなどとたぶんほとんどの審議官が思っていない。

だからウォーロックが使いの者に遅刻の件を伝えたら審議官全員が驚いて軍の派遣を検討していた。

「きっとウォーロック審議官のことだ、やむをえない重大な問題があったに違いない」と勝手に想像していた。

実は遅れた原因はアナスタシアが駄々をこねていたせいで出発が遅れからだったりするのだが……

そのアナスタシアはというと、賢人会議に出席するのがウォーロックの今回の目的のはずだが、どうもアナスタシアの目的は別にあるらしい。

アナスタシアは先ほどから議題の資料を黙々と呼んでいるウォーロックの隣でなにやらぶつぶつと言っていた。

「……やっぱり、アルカディアに着いたら街で一番有名なバルデアおじさん（店の名前）のアイスフラッペ（トロピカルレインボー味）を食べて、そのあとゲルグガで古代遺跡（兄さんが遺跡好き）を見学して、そして、そしてシナムで兄さんと二人きりでホテルに泊まったりして?!（念のためですが夜景を楽しむためです、はい。

アナスタシアに他意はないと思います・・・たぶん）きゃー！私の
ばかばかー！まだ早いってばー！！（何が早いのかはご想像にお任
せします）」

・・・まことに昼間から妄想力だけは素晴らしいアナスタシアであ
った。

その声を無視して黙々と資料を読むウォーロックは本当にすごい。

「うーん。フェルペの治水工事が思ったより進んでいないなー。こ
こはやはり査察官を派遣して様子を見たほうがいいだろうな、うむ」
そんなこんなで囁み合わない会話を（アナスタシアは主に妄想）を
繰り返してカンデムネイアの国境に差しかった。

そのあたりでナターシャから連絡があり、アルカディアについたら
一緒に食事をする事になった。

ナターシャというのは、ウォーロックの友達（少なくともウォーロッ
クはそう思っている）で150cmくらいで青い瞳に青い髪をして
いるのでそれなりに目立つ。

そして何より彼女はかわいい、顔が非常に整っていて特徴の青い髪
も腰の下まで伸ばしていてどこかの貴族の令嬢を思わせる。

・・・というか、そうらしい。というのは後から知った。

初めてウォーロックが彼女に会ったのはゲルグガの古代遺跡の中だ。
ゲルグガの古代遺跡は非常に古いものらしく、謎の文字と物体が数
多く見つかっている。

数多く謎のものが見つかったのはいるものの、ほとんどまったくあの
遺跡が何であるのか？は今でもまだわからないままだ。

リーネにある高等古代研究機関ロストハンターズで調べたりもした
のだが文字が解読できないし、それに物体も使い方がわからないも
のばかりであるからだ。

ウォーロックはその謎を解明したい、とまではいかないものの男（ロマンの探究者）として

とても遺跡に魅かれ自ら調査をしていたのは2年ほど前のことだろうか？

その日ウォーロックはゲルグガの危険指定地域の研究をしていた。危険指定地域とは遺跡のなかでも最も危険度が高く、崩れかけているところも多い。

さらには古代魔法の類があちらこちらに存在していて、うかつに動くの間違ひなく命が危険だ。

そんなところで、一人で古代文明の研究をしていると「たすけてー」という声が聞こえた。

それで気になって声のするほうへ向かったところそこにいたのがナターシャであった。

彼女はキャミソールに短刀という非常に軽い装備で、正直ウォーロックも驚いた。

・・危険指定地域でその格好はないだろ・・・

その少女の前には一匹の魔獣、グーグだっけ？がいた。

「あ、あなた！！！たすけなさいよ！困ってるの！聞こえてるでしょ？！こんなに可愛い子が頼んでるのよ？！早く助けなさいよ！使えないわねー早くしなさいよ！！」

ウォーロックは一度考えてみた。現在の状況と自分の立場とを。

結論。

正直ウォーロックは面倒だと思った。なに？この状況は？どうして私が責められてるんだ？

しかし、とりあえず助けることにした。ウォーロックは基本的にお人よしだからだ。

魔獣にむけて手をかざし「イグニス」と言うと魔獣は燃え尽きた。

「大丈夫ですか？お嬢さん？」

「もーもっと早く助けなさいよね！！あぶなかったじゃない！！」

「・・・す、すまない」

「ふん！！もういいわ、早く出口まで案内しなさい」

「・・・」

「ちょっと黙ってないで早く出口まで連れて行きなさいよ！！」

あーやっぱりめんどうなことになってしまったと苦笑するウォーロツクであった。

D. B. immune

29888.678119

Point σ Sector φ#175

ラインの構築を開始。エラー221

このコンテンツは表示されません

規格外申告

測定中

完了

再起動

きつと世界は欺瞞に満ちている。
だから考えることをやめた。

なぜかって？それは無意味だからさ。
無意味なことを無意味にやってもしかたないだろう？

結局なにをやっても同じ結果が出るかもしれないのに

がんばって何になる？

がむしゃらに生きて何が残る？

それで本当に何かをなせるのか？

それで本当に幸せなのか？

君の未来は確実に明るいのか？

わからないだろう？

そう、わからないんだ。

不確実性。

人は恐怖する。

次に何が起こるのかわからないからだ。

そしてそれは道であるからだ。

そう、未知であるためだ。

では、どうすればよいのか？

きつと昔の偉い人は言う。

「だからこそ超人にならなければならぬ」と。

隆哉は世界に生まれる。新しい世界だ。

ここは時間も空間も制限がなく無限大だ。

生まれおちる前に彼には重大なことを伝えなければならぬ。

そう、彼にはメッセンジャーになってもらうのだ。

彼は選ばれた。それは気まぐれかもしれない。
彼は選ばれた。それは幸福ではないかもしれない。
でも、彼は選ばれた。

それが結果であり歪むことのないただ一つの事実。

生まれる前の彼に干渉をする。

ATGCGTTGCGATATTGCCGAACGTT
GGTACTATGCTTGDTCCGTCCTAG
TAGCTGATCCCBAGTCTTCGATGG
CTAGTCGATCGGGCTTTACATAGA
CACTAGCTGAACCTGATCTCGTAG
CTGCTGAACCTGCTGTCTAGCTC
GTTGGCTGCTGTACGTGATGCA
CCTGTCGTGTCGTCAGTACGAA
TGACTAGCTAGCCATACGGAACA
TAGATCCCACTGACGACTA

.....

時間を戻す。そして始める。それが本来のあるべき姿。
隆哉は目を覚ました。

8畳ほどの部屋で窓があり、白いカーテンから透けて光が差し込んでくる。

天井を見る。ただ天井を見る。

その白い天井はどこにも記憶に存在していなかった。

手を動かしてみる。

・・・動いた。

足を動かしてみる。

・・・動いた。

声を発してみる。

「・・・うあ」

起き上がる。

隆哉は改めて辺りを見回した。

白い、そして鼻につく潮の香り。

ああ、ここはどこかのホテルだろうか？

窓まで移動する。

外は海が見える。

ビーチだ。

白い砂浜。

静かだ。

波の音を聞きながら隆哉は考えた？

「僕は誰だ？」

どう考えてもわからない。

記憶がないのだ。

一つわかるのは僕は月を恐れ、そして懐かしい気がした。

考えていても仕方がないと隆哉は外に出る。

どこまでも白い砂浜を歩く。

「僕は誰？何でここにいるの？ここはどこ？」
海に向かって叫んでみた。

ざざーん。ざざーん。ざぶーん。

「・・・」

ざざーん。ざざーん。ざぶーん。

隆哉は空に向かって叫んだ。

「僕は誰だー?!?!」

「・・・隆哉」

どこからか声がした。

「ここはどこだー?!?!」

「・・・レスターバ」

「なぜ僕はここにいる?!」

「・・・この世界をつくりかえるため」

「・・・」

「・・・」

「・・・そう、か」

「・・・そうだ」

「でも、どうやって？」

「君には力を与えた」

「どんな力」

「神の代行としての力だ」

「それは何ができる？」

「無論全てだ」

「・・・なぜ、僕が？」

「選ばれたからだ」

「なぜ、僕が選ばれた？」

「・・・・・・」

「ねえ、なんで？」

「・・・・・・」

そしてその存在の気配は消えた。

正直なところどうしたらよいのかわからなかった。

けれど何もわからない僕は、先ほど何も詳細がわからないやつから与えられた課題しかない。

だから言われた通りにすることにした。

「須く光にかえりたまえ」

そして世界は色を失い無色の光になった。

隆哉は望むものを創造し、世界のカタチをつくる。

そして。彼は確かに言った。

「産めよ。増やせよ」

そこで干渉が始まった。

世界の干渉だ。

世界と言う名の一つのエネルギー体。

そのエネルギー体が隆哉に干渉してくる。

それはまるで意思を持つかのように隆哉の精神を浸食する。

「・・・われはかみのだいこうしゃ」

隆哉は世界のエネルギーを吸収し、光に変換。

そしてそのエネルギーを望みのカタチにしていく。

そしてすべての世界のエネルギーを変換し終えて、達哉は笑う。

「・・・これでわれのしくむもたっせいされた」

隆哉は勝利宣言を行った。

「われはかみのだいこうしゃ。われにさからうはたいざい」

世界の果てで神は笑う。

「よくやった道化。それでこそワガシモベ」

そして世界はまた動き始めた。

The Day after C. M. (前書き)

どーもランドパーク西です。

あけましておめでとうございます。

書くの遅くてすいません。

あと、感想もポイントも何も反応がないのは書く者として少しつらいですね。

んーなんでもいいから感想とか欲しいです。

The Day after C.M.

裏の裏の裏。

そこは無法状態。

万物の法さえもそこは歪にカタチを変えてしまう。

そこからのことは……

誰も何も知らない。

「お前に何がわかる？」

「お前に何がわかる？」

「いったい。お前に何がわかる？」

ざくざくとナイフを突き刺して男は笑う。

その黒く濁った眼で男は狂気を振りまく。

「……………なんだよ。もう終わりか」

男はつまらなそうな表情を浮かべ闇に消えていった。

「死こそ我が狂気！感動だ！感動したぞ！神は死んだぞ！死んだんだ！」

闇の中から声が聞こえた。

マルコ・デローサ・フォルメツチは狂気に支配されていた。

雨が降るのが定説で彼にはそれがなかった。

彼は雨が嫌いだ。

雨も彼が嫌いだ。

彼は狂気と言う異常を抱えて生きていた。

その人型の中で彼はもがき苦しんだ。

「血がほしい」

「殺したい」

「すべてが死だ」

彼は永遠という終わらない時の代償に、もがき苦しんでいた。

それはたしかに彼の臨んだ結末のひとつであったが、その現実はいかに酷く、見るに堪えないものがあつた。

結論彼は人間ではない。

それは永遠によって彼が狂気に支配されてしまった結果ではなく、彼は

永遠を望むその前からのそうであつたのだ。

たとえば今、プレートトの境界にいるとする。

そこには幾重にも重なる境界がある。

向こうが生でこっちが死。

そんな境界が幾重にも重なっているのだ。

そんな場所に彼は存在た（いた）。

拒めるならすべてを拒みたくてただ必死に堪えていた。

一人でずっと。

そのうち彼は何も信じられなくなった。

だって。

そうだろう？

最初彼は親を信じた。

自分が生まれてここに存在するのなら親が存在るはずだと考えたからだ。

そして彼はこの境界の地で何年も待った。

結果としては、いくら待っても待っても誰も現れなかった。

そして絶望した。

彼は絶望したんだ。

なにも信じられなくて終わらない時があった。

ある雨の日、そこに一人の男が来て「どうしたの？言っでござん？」
と言ってきた。

僕はこう答えるんだ。

「僕の幸福はどこ？」

「君の幸福は私が持ってるよ」
と男は言った。

僕はもう何が何だかわからなくなって叫んだ。

「え？返してよ！僕の幸福！！！」

「ちょっとこっちについてきなさい」

男は言って僕に背を向ける。

僕はもう限界だった。そう、限界だった。

この永遠の時も。

体の中から僕を蝕む狂気も。

彼はもう限界だった。

それがそう。12月の26日のことだった。

加速＝2 N. P. S. N. L. S. (前書き)

感想くださ〜い><

なんでもいいんでお願いします。

そして、今回のこの話ですが、今までの加速と関係ないですw

あと、今回はちょっと残酷な描写もあるので本編にも、今のところあまり関係ないので、そういうの嫌いな人は見ないでください。

加速—2 N・P・S・N・L・S・

さて、まだアルカディアに着くまで時間があるのだが、あまりウォーロックと

ナターシャの話ばかりしているとアナスタシアのかわいい顔が鬼のような形相

に変化してしまうので、他の話にしよう。

【なんの話がお望みだろうか？

意見があったらぜひ教えて頂きたい。】（作者によるコメント）

「なあ、なにもない場所ところに人は生きられると思うか？」

「なに言ってるんだよ。そんなの無理に、決まってるじゃないか」

「そうか。そう・・・だよな」

夕陽に照らされながら2人の青年は語り合っていた。

「でもさ、急にどうしたんだよ？」

「いや、なんでもないんだ。気にしないでくれ」

「・・・そうか」

「・・・ああ、すまない」

一人の青年はもう一人の青年に謝罪した。

「じゃあ、また明日な！」

「ああ、またな卓登」

2人の青年は分かれ道で別れた。そこが、分岐点でそこが分岐の場所。

それからそれぞれの目的に向かっていく。
それでも。

それでも幸福であれば、よかったのかもしれない。

それが、2人の望んだもの。

卓登と呼ばれた青年は、裏路地に入る。

夕暮れのこの裏道は不気味な光を放ち、どこかで唸り声が聞こえるのはいつものことだった。

パーンという乾いた銃声も、ときどき聞こえてくるくらいにこの裏路地はその名の通り裏であった。

裏路地に入っすぐに180?くらいの男5人に囲まれた。

オールバックの男がこちらをにらみながら言う。

「お前、ここがどこだかわかってんのか？」

「・・・」

卓登が無言でいるとオールバックの隣金髪がキレた。

「おい！！てめえきいてんのか？」

「・・・やれやれ。これだから低脳は・・・」

卓登が低脳と言った瞬間に金髪は卓登に向かって突っ込んできた。

「死ねや！オラ！！」

男の突進を少し前かがみに倒れて左にかわすと、ポケットの中心にぎりしめていたナイフを取り出し金髪に刺した。

『グサッ』と金髪の右の脇腹に刺さったナイフからは赤い鮮血がおびただしく流れてくる。

「ぐ、うえ」

と前のめりに金髪は倒れこんだ。

倒れこむとき卓登は金髪から無理やりナイフを抜いた。

そのため金髪の臓物が飛び出てきたが卓登はまったく気にしなかった。

「修二！！！！てめえーよくも修二を！！」

オールバックの男と残りのカスがキレている。

それを卓登は「無様だ」といい嗤った。

オールバックは銃を取り出し、ほかのカスはナイフを取り出した。どうやらオールバックが親玉らしいな、卓登は動揺もせずに考えていた。

オールバックは銃に弾を込めている。
その間にカスが卓登に襲いかかってきた。

「「「オラ!!!! 死ねや!!!」」」

「まったく、せりふも行動も一緒とか君たちどんだけ低脳なの？」

卓登はナイフを右手に握り、最初のカ스에体当たりをして転ばせ、次のカスを回し蹴りでコンクリートに打ちつけて殺し、最後のカ스에ナイフを突き立てた。

最初のカスはまだ息があったが、起き上がろうとした瞬間に卓登はそいつの頭を踏みつけて潰した。

オールバックは半泣きでブルブルと震えながら銃をこちらにむけている。

「く、くくるな! お、おまえ! な、なにものだ!!!」

にやりと嗤い卓登は言った。

「貴様の死だよ」

そしてオールバックが銃を乱射するも一発も卓登にはあたらなかった。

「く、くそ!!! ふ、ふざけんな!!! なんで、この俺がこんなめに」

「お前が低脳だからだ」

と言った卓登は、次の瞬間オールバックの男にナイフを投げた。
そのナイフは理想的な軌道を描き男の胸に突き刺さった。

「ぐふッ」

そして男は息を引き取った。

「まったく、つまらない」

そう言い残し卓登はその場を去った。

裏路地を抜けて天閼門に出た。

そこは広場になっている。

そこは人があふれている。

そこは・・・

卓登はとりあえず家に帰ることにした。

このままここにいても仕方ないからだ。

天閼門の広場に群がる人の群れを抜けて卓登は家路を急ぐ。

途中で犯されている少女や、殴られている少年を見たが卓登は気にしない。

そう、ここは正義のない場所。

変わりたい、と願うそのさきで果てたものの集まる場所。

ここにいるやつはみな、『世界』に拒まれたものだ。

その果てのこの場所で、もはや人助けをしようなどと思うやつはない。

みな、自分の欲望に忠実に生きている。

それが正しいのかって？

そんなの愚問だ。

正しいなんてことは、この世に一つもないのだから。

正しいはあるって？法があるって？

ははは、法なんて所詮一部の人間が自分たちの都合のいいようにに決めた、それこそエロゲー会社もびっくりなくらいご都合主義なのだ。

そんなのを信じるだって？

ありえないね。

卓登はこの世界の法の番人の無能を激しく非難した。

まあ、もとは悪くわなかったんだがな、いつからだろうな？

官僚制はやはり腐敗を助長するよな。

そんなことを考えていると家についた。

卓登は少し汚れてしまった服を着替える。

やがて暗くなっていく窓の外の景色にどこかアンニュイな顔をしていた。

加速—2 N. P. S. N. L. S. (後書き)

それで、ですね。

ここだけの話、感想お願いします！

A c t . 1 N . P . S . N . L . S . (前書き)

最近寒いですね。

頭が痛いです、はい。

Act. 1 N. P. S. N. L. S.

朝早くに起きた卓登は、天閨門の広場を抜けて、裏を仕切る者たちが住む黒戦場というところにある自治組織『死と絶望の同志』を訪れていた。

「早いな卓登。今日はまだ先生は来ていらっしやらないぞ？」

「・・・わかってる。あのくそじじいが来てないことなど」

「こら！先生をくそじじいとか言うんじゃない！！」

「・・・ほっとけ」

卓登はその後も、この権藤という男にいろいろ説教を言われたが、たいして気にしていなかった。

くそじじいが来るまで卓登は適当に待つことにした。

ふと視界に入った近くにある本棚に手を伸ばし『呪いと死』という本を手にとった。

暇つぶしにパラパラと本を読む卓登に権藤はまだなにやら言っていた。

「だいたい君ねえ、わかってるのかい？先生がどれほど偉大な人なのかというのを」

正直そんなのどうでもいい、と卓登は思っていたがめんどろなことになるそ

うなので黙っていた。

パラパラとページをめくっているうちにドアが開いた。

そのドアから、いかにも人のよさそうな白ひげ白髪のじいさんがひよこひよ

こと出てきた。

「!!!せ、せんせい!!!おはようございます!」

と、権藤は深く頭を下げた。

いっぽう卓登は「やっと来たか」と言い軽く手を振った。

卓登の中ではもっと早く来いと言う感じだったのだが、何を勘違いしたのか

ドアから出てきた老人は、にっこりと笑い卓登に声をかけてきた。

「今日はずいぶん早くから来ていたようですね卓登君」

卓登は無視しようと思ったが権藤がものすごい目でにらんでくるので仕方なく

会釈をして「・・・どうも」とだけ言った。

権藤はそれでも気に入らないらしく卓登を睨んでいたが先生がそれを目でい

「今日も天気がよくてよかったですね、卓登君」

「・・・はい」

「・・・卓登・・・見つけた」

急に自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、声のしたほうを見ようと顔を上げた瞬間な

にかが抱きついてきた。

やわらかい・・・そして、甘い匂いのするなにか。

「ん・・・なんだねこれは？」

先生が驚いたように冷静に反応する。

榎藤は「えっと、女の子が卓登で抱きついてああー」とあたふたとしていた。

と、いうかちよっと待て榎藤、俺は女の子ではないぞ？？
ってことは？

自分に抱きついていいると思われるものを見る。

身長は・・・145？といったところだろうか？

ピンクの髪で、そのふわふわとした髪は腰のあたりまで伸びている。
においては・・・っと俺は変態か？

とりあえず俺がとるべき次の行動は・・・

「なあ、離れてくれないか？そして誰？」

と言いつつ両手で自分の体から引き離そうとした。

が、女の子？は自分の腰に完全に手を回していたので離れることは
なく・・・

「・・・やだぁー！卓登と離れるのやだぁー！」

と騒いでいる。

あまりにも叫ぶし離れないので周りに配慮して仕方なく近くの椅子

まで行き

そこに座り、抱きついているピンクのそれを自分のひざの上にのせた。

それでもピンクのそれはいまだに卓登にぴったりと抱きついていてなにかぶ

つぶつ言っている。

「ふにゃー卓登く卓登だぁく卓登のにおいがする♪」

「・・・あのさ、君は誰なのかな？どこかであったことある？」

おそろおそろ卓登は聞いてみた。

なぜおそろおそろなのかって？？

実は卓登は女の子が苦手だったのだ。

く回想く

なぜかというとむかし、卓登がこどものとき美菜葉という幼馴染がいたのが

原因だ。

美菜葉は・・・周りの人から見ると、とてもかわいらしくて

おしとやかなで性格もやさしい、しかも柏木グループのお嬢さま

なのだが・・・卓登にとっては違った。

なぜか、卓登は美菜葉にとっても好かれていたのだが、そのせいでなんども卓

登は人生が終わりそうなことがあった。

例えば、あれは5歳だか、6歳だかのころのこと。

美菜葉はめったに柏木の御屋敷から出なかったのだが、その日はそれを見か

ねた美菜葉の親父さんが俺に美菜葉を公園に連れていくようにいったのだ。

それで、俺は美菜葉を連れて近くの海上が原公園に連れて行った。念のため俺は、美菜葉の執事の眞庭弘道も連れて行った。

これがよかった。

つーかそれがなければ今俺はいないだろう。

美菜葉と楽しく公園で遊んでいると、同じ年くらいの子に僕もいれてくれるか

な？と話しかけられたのだ。

「ねえ。僕も仲間に入れて？」

俺はべつにかまわなかったし、美菜葉も俺以外の友達をつくったほうがいいと

思ったので俺は「いいよ」と言ってしまったのだ。

そのとき美菜葉がちょっと黒いオーラを放っていたらしいのだが、

俺は気がつ

かなかった。

そのあとその子をいれて3人で遊んでいたのだが、ふとトイレに行きたくな

った俺は「ちょっとトイレにいつてるねー」と言うと「私も」と美菜葉。

もう一人の子も「僕も行く」と言い、みんなでトイレに向かった。

そこで気付いたんだ。ずっと男の子だと思ってた子が・・・女の子だって。

弘道さん曰く、俺がその子を仲間に入れた時点での黒いオーラが1とすると

相手が女の子だとわかった瞬間のオーラは10000は軽く越えて

いた、と。

俺はそんなこともわからず、トイレを出たあと、次なにして遊ぼうか？と考え

ていると美菜葉が滑り台で遊ぼうというのでそうすることにした。

そのあと悲劇が起きた。

女の子が滑り次は俺というときに突然美菜葉が俺を押し込んだ。

そのまま俺と美菜葉は滑り台を滑り降りた。

俺は後頭部を打ち、さらに頭から滑り、そのうえに美菜葉が抱きつく形で滑った。

正直、頭が痛いし。さらに頭が擦れて痛いなんのって。。

あわてて弘道さんが俺を病院に連れてってくれてどうにか大事にならずにすんだのだが。

それからというものの美菜葉は俺にべったりとくっつくようになって、親衛隊とかにいろいろ

と・・・この話はまた今度つと。

～回想end～

そんなこんなで卓登は女の子が苦手だった。

それなのにいきなり知らない女の子に抱きつかれているからだ。

まさしく、これなんてエロゲ？な状態の自分に盛大につっこみたかった。

「うー！卓登のばかぁ！僕だよ、僕」

僕？男なのか？と考えたが、自分の胸の辺りに小さいながら

もふたつのふくらみの感触があったのでその考えを一瞬で流した。

俺に女の知り合いはいないはずなんだが・・・

「なあ、君。誰かと間違えてるんじゃないか？それと離れてくれ」

「・・・卓登・・・ひどい・・・」

いや、ひどいって言われても・・・なあ？と権藤を見る。

権藤はまだあたふたしていた。

先生を見る。

白い上品な髭を右手でなでながらその視線は窓の外をむいていた。

・・・たよりにならねーな、おい。

「わかった。じゃあまず名前を教えてくださいるか？」

そうすればなにかわかるかもしれないしーと卓登は考えた。

「・・・ぐすつ。。ゆじゆ・・・」

「ゆじゆ?..?」

「そうなの。ゆじゆなの」

・・・正直ところあたりがなかった。

A c t . 1 N . P . S . N . L . S . (後書き)

なんだかなー もっと上手く書けるといいんだけどなー O r Z

グランコートの侵入者（前書き）

更新がとても遅くなっていました。

何回も書きなおしてみたのですがなかなか思うように書けませんね。

グランコートの侵入者

…ジェノイド・アルメッソ

いつものことがいつもでないような感覚に思うことがあると、私は考えることが多い。

私は考えるのだ、当たり前は実は当たり前ではないのではないかと。当たり前が当たり前であるのは当たり前を支持する法則があるからだ。

つまりその法則＝ルールが改変されてしまえば、簡単に当たり前だと思っていた日常なんて崩壊してしまうのではないかと。

日々を虚ろに過ごしている私にはそれを見極めたかった。

日々が虚ろである自分に意味はなかった。

日々が虚ろである自分を認めたくなかった。

だが、この繰り返しの中で私は確実にこのまま朽ち果てていくだろう。

それは私は嫌だ。

だから、もし。

その法則を破壊できるのなら壊したい。

思えば私にとって未来など、あの日にすべてなくしてしまったようなものだ。

そんな現実はいらない。

ただ、私を苦しめるだけの法則なんていない。

だから破壊したい。

なぜかって？それが今の私にできる唯一の抵抗だから。

それを破壊できるのかどうかって？

それを見極めるため、大いなる愚行を試みようと思いついたのだ。

故に、私に後悔はなく。

故に、恐怖もなかった。
なぜなら私はそこまでの感情を持ち合わせていなかったからだ。

私は今グランコートに向かっている。

私が今向かっているグランコートには大憲章と呼ばれる有名なアイテムがある。

アイテムと読んでいるのは、それがどんなものか正確にはわからないからだ。

武器とも言われているし、書だと言われている、また旗であるとも言われている。

正式には大皇帝の憲章というのだが、一般的に大憲章という名で通っている代物だ。

アイテムの詳細については不明だが、巷では持つと皇帝になれるとか、皇帝のように巨大な力を得るとか、ただ皇帝が使っただけだとか様々な憶測が飛び交っている。

そんな得体もしれないアイテムだがもちろん国宝であり、アルカディアでは厳重に保管されている。

その保管場所というのが・・・

・・・そう、グランコート。

私にとってそのアイテムが目的と言えば目的なのだが、別に盗る気はない。

ただ、その謎に包まれたアイテムを一目でいいから見てみたいと思ったのだ。

まあ、こんなことを考えるのは私くらいしかいないと思う。

たいていは盗んで売るとか、力を手に入れて世界を自分のものとかそんなバカが挑戦するものだ。

私のように見ただけなんて人間はそれこそ、この世界に私だけかもしれない。

つまりは私はかなりの物好きで、そしてあほだと思われることだら

う。

それでもいいのだ。

否、それでいい。

人間には寿命がある。

それは確実にやってくる。

だが人間は死ぬまでに為したいことが山ほどある、そしてそれは無限につくりだせる。

それに対して時間とは？

時間は無限に近い存在だが、時間は物質に直接作用を与える。

この世界のものは、どんなに小さくても物質により構成されている。その本質の物質に作用を与える時間というものは、つまり・・・

どんなものでも必ずいつか線を引いてむこうに連れていってしまふ。

不老や不死を求めるものをも。

例外はない。

一度時間によって線引きされた物質は逃れられない運命を受ける。

それに対する抵抗が無限に対する憧れではないだろうか？

無限とは、きっとそういう時間という線によって生み出されているのだろう。

曖昧に見えて、唐突に見えて、明確で、必ずくる、その時になるまで見えない線。

それが死の本質だと、私は考えるのだ。

その日は雨だった。

いつのまにか降り出した雨。

いくつもの大粒の雨粒が私に染みをつくり落ちていく。

私の身体を伝い大地にぼたりと落ちていく雨粒は音もなく消えていく。

やがて雨粒は大地に落ちても消えることなく、水溜りを形成し始める。

そんな光景を私はずっと見ていた。

柔らかい空気の中、ずっと見ていた。

私は・・・

私は今ここにあるんだって。

私の服はびしょびしょで、ずいぶんと重くなっていた。

それでも私はそこに立ち、そこでなにかを待ち続けた。

雨の降る音だけが私の世界だった。

その雨の中でさえ、私は死について考えていた。

永遠にも近いような感覚。

まどろみの世界。

一瞬が永遠を呼ぶ感覚。

他者の声。

聖者の憤怒。

死者の言葉。

それでも私は悲しくなかったし、満足などという感覚はどうに忘れてしまっていた。

ただ惚けていた。

そう、ただ惚けていただけなのだ。

朝。

光がまぶしい。

私はグランコートの近くの宿で寝ていた。

昨日あの後・・・不覚なことに体調を崩してしまったのだ。

まったく何をしに来たんだ自分は？と心の中で自分に愚痴をこぼした。

まあ、2、3日も休めばよくなるだろう。
まったく。

とんだ時間のロスだ。

まあ、いいか。

そんなに急ぐことでもないだろう。

しばしここで休もう。

そして私はまた眠りについた。

それから2日ほどして私の体調はすっかりよくなった。

寒気も熱も咳もなくなった。

この宿からグランコートまでは歩いて1時間と行ったところだろうか？

荷物をまとめて早朝、私は宿を出た。

サントローレンヌ川沿いの道をゆっくりと歩く。

川はまだ静けさにつつまれ水の流れる音がするのみだ。

私はさながら死地に向かう兵士のようなものだが、のんきに鼻歌な
んかを歌っていた。

川のせせらぎと私の鼻歌が相俟って私の心はなぜか晴れ晴れとして
いた。

心境だけを言うなら死地に向かう兵士というより死地を制した将軍
のようだ。

まったくこんなときまでのんきだなんて本当に私はあほなのだろう
か？

歩いている途中で行商の荷馬車を見かけたが特に気にはしていなか
った。

ただ、その行商の中の荷馬車の一つに甘い香りのするものがあって、
甘いものに目がない私はふらっとそちらへ向かってしまった。

そこでクッキーを少しばかり買い、そこからはそれを食べながらグ
ランコートに向かっていた。

さながらピクニックだ。
幸い天気もよい。

そんなこんなでグランコートに着いた私は、とりあえずポケットからコインを出してグランコートの守護者である、アルカディア独立機動部隊所属グランコート駐屯小隊にむかって投げてみた。

十秒ほどの時間が経ってコインは地に落ちることなく姿を消した。さすがに結界を張っているようだ。

これはめんどろなことになるそうだと考えているとふいに声がした。

「おい、お前。ここで何をしている？」

さっそく見つかってしまったし、さてどうしようかと考えていると・

・

「おい！そこのお前だ。聞いているのか？ここはグランコート、アルカディア審議会本部直轄領だ。なんのようがあつてここにきた？今日は特に来客の知らせは受けていないぞ？」

「・・・私は少し見学させていただこうと思っただけです」

「見学？ここは一般に中を開放している施設ではない。帰りなさい」

「命じる」

「・・・」

「戻りなさい」

「はい、わかりました。ここは異常なしですね」

まったく私としたことが危なかった。

あと少しで素敵アイテムを見る前に捕まってしまうところだった。なんとか強制と幻惑のワードもどきを使って乗り切ったが、次も上手くいくとは限らないのでなるべく見つからないように行動することにした。

なにより言葉をそれ自体に魔力と効果を付加するのは意外と集中しないといけなくて大変なのだ。

そのまま歩き続けて城門の前までくることができた。

だが、城門には見たこともない魔法がかかっていた。

だが私には特殊なスキルがある。

それが鍵破壊キーブレイカーである。

これは無条件で鍵を破壊することができる。

必要な手順も支払う対価もなく、ある意味最強なスキルだ。

これは鍵を破壊することにだけ特化しているスキルなのだ。

ただし効果は本当にそれだけ。

使えるように実はあまり使えないようなスキルなのだ。

対価も手順もないのだが効果が本当に鍵を破壊するだけなのだ。

私はそのスキルを使いまんまとグランコートに侵入することができた。

内部に潜む罠（前書き）

大変更新が遅れましてすいません。遅れた理由についてはいろいろとあるのですが活動報告に書かせていただいたコミックマーケットのことが大きいです。もっと計画的に、と思った今日この頃です。それではどうぞ。

内部に潜む罠

…ジェノイド・アルメツソ

グランコートの中は静寂に包まれていた。エントランスをぬけると長い大理石の廊下が続く。

ところどころにあるステンドグラスから神々しい光が差し込んでくる。

コツコツと私の歩く音だけがただ廊下に響く。

長い廊下。

天井を見ると神獣や聖者、神が描かれている。

この廊下は非常に長いのだが10mごとに左右に銅像があり、銅像の左側は扉、右側は廊下が続いていた。

しばらく進んでいた。

最後の審判や最後の晩餐。

なにもつながっていない。

いや、どちらも最後という点においてはつながっているか。

私は考えた。

一つ、あまりにもこの廊下は長すぎることに。

二つ、同じような光景が続いていること。

この二つの点から私は幻惑の魔術にかかっているのではないかと推論した。

「私は道化なのでしょうか？」

「いえ、あなたは素晴らしいです」

どこからか声が聞こえた。

「どこがでしょうか？」

「機能性です、たんなる誇りです」

私と相手とは会話があやふあやでつながっていない。これはどういうことか？と思考しようとしたが・・・

「ならば。この、太刀線眼流緋炎剣を受けるがよい」
また、新しい声が聞こえて私は

「はは、私がそんなものをくらうと思いますか？」
ちよつと雰囲気の流れされてみた。

「くらうかくらわなないかが問題ではなく、ダメージをうけるのかどうかというのが問題なのですよ」

「まったく意味がわからないのですけど？」

「わかる必要などない。この迷宮の回廊で貴様は彷徨い続けるのだから」

「それはつまり、私はやはり幻術かなにかに囚われていて、ここから抜け出せないということですか？」

「聖なるものは神なるもの。その神の、神の威光も誇りもすべて我が心情を慮る」

光が私の目の前で収束を始めた。フラッシュのように強い光が一瞬私を包み込んだ。

「うっ！まぶしい」

私は声を出してしまった。それほどまでにまぶしかったのだ。

「反転逆式。光は我に我は光に」

世界が回る。音を立てて回る。ぐるぐると回る。

そして、世界は強烈な光に包まれ、私も強烈な光に包まれた。目を開けるとそこに立っていたのは、黄金の瞳をした青年がいた。

「愚民か・・・貴様はなぜそこにいる？我を呼んだのは貴様か？」とても偉そうな口調でその青年は言った。

「私はたしかに愚かであるかもしれませんがあなたがあなたを呼んだ覚えはありません」

「くくく・・・自らが愚かであることを認めるのか。おもしろいやつだ。ああ、実にもしろい、実に愉快なことじゃあないか。いいだろう貴様の名は？」

「・・・よくわかりませんが。ジェノイド・・・ジェノイド・アルメッソです」

「そうか、貴様がジェノイドか。まったく、リリカが騒ぐから何事かと思ったぞ。本当に。それもこれも貴様が封印を壊したからだが」

「封印を壊した？私がですか？」

「そうだ。貴様が壊したからこうして我はここにいるのだ」

正直、意味がわからなかった。しかし、少し考えてなんとなくわかった。私がここに来るまでに壊したものといえば・・・そう、鍵だ。ここグランコートに侵入する際に壊したのだった。もしか、あれがなんらかの封印だったのだろうか？

「くくく・・・気付いたようだな。さすがだジェノイド、ほめてやる。そうだ、だいたい貴様の予想の通りだ」

「・・・・・・・・しょうじき、よく話がわからないので愚かな私でもわかるように説明していただけますか？」

「まあ、いいだろう。簡単なことだ。我は鍵を守る存在。いや、正確には契約によってここ、すなわちグランコートを守ることになっていた。だがな、時代が過ぎアルカディアの衛兵のレベルも上がり我のところまで来るものはめつきりと減った。そこで我はつまらなくなつてな、リリカに任せて眠っていたのだ。そしたらなんだ。いつのまにか封印の鍵が壊されていてリリカが大騒ぎをするし、我も起きざるを得なかったのだ。そうして今に至る。こんなところだ。」

「・・・・・・・・そうでしたか、いろいろとすみませんでした」

「ハハハハハハ、気にするな。我もちょうど眠るのにも飽きて退屈だったのだ。しかし難儀なことだな。我は封印も壊れたのでな旅に出たいと思うのだが、路銀がない。ジェノイド、我に仕えぬか？」

どうしてこのような展開になっているのか私にはわからなかった。しかし、いつのにか私は首を縦に振っていた。

内部に潜む罠（後書き）

こんなに長らくお待たせしたあげく短くてすみません。私はどうやら書くのが遅いらしいです。精一杯がんばっていいこうと思いますのでこれからもよろしく願います。

夢（前書き）

音が、音が重さになってくる。

夢

夢は幻、夢は現。

夢は夢。

夢は人生。

夢は人間。

夢は月日。

夢は他人で、その夢はその夢は。

夢の向こうに人の夢。

人の世界に人の夢。

ああ、こんなにも広い世界で僕は。

僕はケチャップをトマトでつくったんだ。

ああ、トマトでつくったんだ。

え、なんでだって？

だってケチャップなんだから、ケチャップってトマトからつくるものでしょう？

僕は何も、何もおかしいとは言っちゃいないよ。

ただ、結果だけ言ったんだ。

過程だって？

過程なんて知らないさ。

理由だって？

理由なんてゴミ箱に捨てちゃったよ。

そんなもの犬も食いはしないよ。

それは言うんだ。

僕に言うんだ。

大事なものはね。

原因と結果。

そう、そうなんだ。

え？なんだって矛盾してるって？

どこがだい？

もう、僕にはわからないよ。

いや、前からそうだったんだ。

そう、何もね。

何もかもが向こう側なんだ。

そう、だから。

僕の側にあつて、僕が手に取れるのは結果しかないんだ。

ああ、そうだな。

ケチャップはおいしいよ。

ああ、僕はとても好きだ。

なんてったってトマトで、あのトマトでできているからね。

そう、トマトなんだよ。

そう、あのトマトなんだ。

朝から頭痛がした。頭の中には意味のわからない図形やら言葉がずつと浮かんでいた。

水でも飲めば少しはよくなるかと思い、私は重い体をベッドから起こしキッチンに向かった。

ふらふらとおぼつかない足取りでキッチンに向かう私。

朝の日差しが窓を半分ほど覆っているカーテンの隙間から差し込んでひどくまぶしかった。

覚醒しきっていない私の頭は、ふと私になにを思ったのだろうか。私をキッチンではなくベランダへと向かわせた。

階段を下りずに自室に戻った私は、パジャマ姿で窓を開けて外に出る。

外を吹く1月の風は、思ったよりも冷たく、そして私の心身からす

さまじい勢いで熱を奪っていった。

私は奪われていく熱を感じながら、頭で理解しながら動けなかった。

私の体はすでに私の命令を受けつけてはいなかった。

私はそのまま枯れた。

枯渴した。

私の存在が、理性が枯渴していた。

急速に冷えていく、私の心身と頭。

そして私の意識は、砂漠に咲くサボテンの花のように、一瞬だけきれいな花を咲かせてそのまま地へと落ちて行った。

ああ、無常。

そこには普通なんて、一般なんて、平均なんて、まして平等なんてものは何一つなかった。

いつまでか、いつからか。

人の不平等の起源は人の起源からだったのではならだろうか、思うようになったのは。

そして、そのまま。

月日は流れていくだろう。

私がいたこともやがて人は忘れていく。

私が残したこともすべて埋もれていく。

肥やしにすらならないかもしれない。

最後に気になったことは、私の熱は、いったいどこに放出されてしまったのだろうか。

そして、その熱はどうなるのだろうか。

夢（後書き）

ハムよりもベーコン。

白い砂（前書き）

消すかもしれません。修正するかもしれません。

白い砂

土臭いにおいがした。

辺りを一面覆うほど強烈な臭いだった。

しかし、少年はたいして気にしなかった。

いや、気にしている余裕もなかった。

いくつもの欠片を胸に抱えて少年はただひたすら走った。

目的地は決めていなかった。いや、決められなかった。

少年には迷いが多すぎた。

そのいくつもの欠片が結果として彼の邪魔をして決断がなかなかで
きなかった。

彼は自分の2本の手に、持てるだけのものを持っていた。

彼の両手はそれらでいっぱいだったから彼は目の前をチャンスが通
り過ぎてても、ただそれを見過ごすしかなかった。

少年には夢があった。

しかし、その夢は今の少年には手の届かないところにあり、そして
同じ時期に少年を襲った不幸があった。

それでも少年は負けなかった。

必死に努力した。

生きていくために努力しようと努力した。

一度は生きていくために努力しようとした、けれど少年にはその先
が見えなかった。

そこにさきほどの不幸が重なって、少年は立ち止まらざるを得なか
った。

少年はわけがわからなくなっていた。

自暴自棄になっていた。

少年は絶望した。

深く絶望した。

ただでさえ叶うまでに時間がかかるものが、もっと遠くにいつてし

まったのだから。

光の中を少年は走った。

家から出てすぐの道を全力で走った。

それは彼の彼の運命に対する必死の抵抗で、けれどもそれはあつさりと官憲によって潰えてしまった。

少年は親元に帰された。

そして、少年はまた家を抜けだした。

なぜなら、その家に彼の夢はなかったのだ。

彼の夢は大きく、そしてその家の中では抑えきれないほどのものであった。

彼の両親は最初、彼を学者にしようと苦心した。

けれども、彼の相当な抵抗を受けてそのことはあきらめざるを得なかった。

しかし、それで少年が自由になれたわけではなかった。

彼は一人苦悩した。

なぜ、自分はこんなにも苦しまなくてはならないのか、と。

初め、彼は神に縋ろうとした。

神のことを学び、熱心に念仏を唱えたりした。

けれども神はいなかった。

いや、昔はいたのかもしれないが彼の前に現れた神はすでに死んでいたのだった。

彼はそのことを知り再びショックを受けて自分の殻に籠った。

そして彼は絶望した。

彼は神に絶望した。

そして彼自身にも絶望した。

自分は救われない人間であるのだと絶望した。

絶望しても絶望しても尚、生にこだわり続ける自分に絶望した。

ああ、なんと自分というものは自己中心的な生き物で、ましては怠惰であり、自分でなんら努力をしようとしないうちに神と言う法外

な存在に頼り、その結果神はいたのに死んでいたくらいで絶望し、その上でもまだこうして生きている。

なんと、人間とは自分勝手な生き物であるのか、と彼は独白した。神に独白した。

彼は気が少し楽になったような気がした。

1月のある日、木漏れ日が差し込むような比較的暖かな日。

彼は静かに決意を固めた。

これから、自分で自分の人生をつくり、そして生きよう。

精一杯生きよう。

泥臭くても汗臭くてもいい。

自分にしかできない、自分だけの人生というものを生きてみようじゃないか。

せっかくこの世に生まれ落ちたのだから。

木漏れ日が彼を強く照らし出していた。

彼の右手には一握りの真っ白い砂が握られていた。

白い砂（後書き）

短くても投稿することにしました。

NEW!

止まらない。

そして、次の時には欠片も無くなっていたんだ。

10月の15日の事だった。

詰め込みすぎたトランクがなかなか締まらなくて悪戦苦闘していた
ときのことだった。

荷物を減らせばいいのだが、私にはあいにくすべてのアイテムが必
要だった。

ここで、人は選択をしなければならない。

とりあえず、新しいトランクを買うとか、またはそもそも持ってい
くことを諦めるか。

だが、諦めるという選択はおそらくしない。

と、いうかできない。

あることが前提のものがなんて人間にはとても過酷なものだか
らだ。

ゆっくりとケースを再び開けて中を整理する。

意外と知らないものが見つかるものだ。

さっきまですべて必要なアイテムに思えていたのに。

人間とは不思議な生き物だ。

見るときによって、そのとき自分に必要なものが変わってしまうの
だから。

ああ、そうか。

あれも、これも。

自分自信でさえ、ひどく曖昧なんだ。

「やあ、君は何を求める？」

「僕は、何もいらぬ」

「そして、すべてが欲しい、と」

「その通りだ、僕は飢えている」

「そうだな。君は飢えている。愛に飢えている」

「違う。人間に飢えているんだ。もっとも人間がほしい」

「人間、か。君から人間を求めるなんて、不思議なこともあるものだ。あれだけ毛嫌いしていたものが」

「それでも、ほしいんだ。いや、手に入れないといけないんだ」

「そうか、ならば私は君を祝福しよう」

「ありがとう、そしてさようなら」

「ああ、どういたしまして。そしてさようなら」

喉が異常に渴いていた。

水がほしい。

水を求めて俺は再び歩き出したんだ。

足はふらふらで視点は定まらない。

それはもうひどい有様で、とても辛かった。

一步一步、歩くごとに僕の身体は軋んでいく。

軋んだ身体は、やがて音をたてるようになって、ひどく耳障りにな

る。

がしゃーん、と一瞬にして崩れ去ってしまえば、いっそ楽なのにと
思ったりもした。

それすらも叶わない夢であるのは承知していたのだが。

どこに行くのだろうか？

どこに向かっているのだろうか？

道は、果てしなく続いているような気がした。

どこまでも続くような道の長い長い道程で、僕は確実に自分を還元
していった。

息をすればするほど、空気を肺に取り込めば取り込むほど、僕の中
の黒い塊は還元されて、やがて
正常なそれになっていくようだ。

足取りを重くなる。

けれど、それは還元されて素晴らしい機能をはっきしてくれる。

頭はもやもやとして、よくわからない。

酸欠そのもの。

けれど、不思議なことに辛くはなかった。

何度目かの旅の果てがここだとしたら、私は、俺は、僕は、いった
い。

考えれば考えるほど辛い。

だから、僕は切り離した。

分離した。

そこに打ち捨てた。

新しい自分がそこにはいて。

その自分は自分に言う。

「ありがとう。そしてさようなら」

missing NOVA (前書き)

愛は世界を救うのか？

missing NOVA

階段を駆け上り見上げた空は、赤茶けた錆びた鉄のような色で、どこか艶めかしくて、そして気持ち悪かった。

肺の奥からこみ上げてくる何かと、腹の奥底から逆流してくる何かによって、息をすることが困難になった。

このまま世界は色を失って、カタチも失って、だから自分も消えていくのだ思った。

夢は夢でしかなかったが、リアルの自分はちぐはぐなパッチワークで、そして縫い目が粗い人形だった。

僕の目はきつと、真っ黒いボタンで僕の口はきつと別の何かのピンク色をした布だった。

鼻は中に綿が詰まっている布で、体もそうだった。

蝶の夢を見た。

舞い踊る。

花に誘われて蜜を吸い、花粉を運んでいく。

苦い、そう苦い。

次は甘い、甘い、そう甘い蜜。

飛んで跳ねて、そして糸に絡まる。

蝶は初めて、不自由をしまった。

空がどこまでも遠くて、砂時計の砂が、ゆっくりゆっくりと終わりに向けて落ちていく。

さらさらと落ちていく砂。

さらさらと落ちていく翅。

さらさらと流れおちていく時間。

糸の主が戻るまでの時間は、どうにも不慣れなせいか、とても長く感じるのだった。

幻だ。

きつと幻だ。

すべて夢で、この夢から覚めたら、また自由に飛びまわれるんだ。

近づく影。

軋むカラダ。

翅はもう、とっくに？がれていたのだった。

「ねえ、母さん。どこにいったの？」

群青色、紫、蒼、灰色、黒。

赤褐色、黄土色、薄紫、茶褐色。

混濁したから、くすんでしまった。

色は輝きを失った。

それでも、彼は混ぜた。

「あれから、また新しい時代が来ると、繰ると」

「やあ、君はそうか、君が…」

ラインの外にある月。

欠けた世界。

止まらない。

それは止まらない。

「やつらが来る」

「なぜだっ！貴様、なぜ裏切った」

「私は裏切ってなどいない。ただ、君はそこまでの人間であったということだ」

「き、貴様っ！情報を売ったな！！」

「人間きの悪い。私はただ、情報を貨幣に変換しただけですよ」

「…ぐっ。また、またいずれ会おう。次会うときは貴様を必ずおくってやろう」

「ははは。それはとても頼もしい。ぜひお願いしますよ」

手のひらから砂が流れ落ちた。

さらさらさらさら。

missing NOVA (後書き)

旅立ちと運命と人間。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1507h/>

第三世界～偽りと虚無と絶望と幸福

2011年11月16日09時53分発行